

審査結果の要旨

報告番号	甲 第 1270 号	氏名	安 陪 由 思
審査担当者	主 査	梅野 博仁	(印)
	副主査	島村 拓司	(印)
	副主査	大島 孝一	(印)
主論文題目 : Expression and role of regulator of G-protein signaling 5 in squamous cell carcinoma of the tongue (舌口腔扁平上皮癌における regulator of G-protein signaling 5 の発現と役割)			

審査結果の要旨 (意見)

舌癌における RGS5 の発現については未解明の部分もあるが、舌癌の局所浸潤やリンパ管浸潤との関連を示した有意義な論文といえる。

また、RGS5 の発現が上皮間葉転換に関与する可能性を示した論文として価値の高い学位論文である。

舌癌における RGS5 の発現については、今後の臨床応用に期待したい。

論文要旨

Regulator of G protein signaling 5 (RGS5) は 35 種以上ある RGS ファミリーのひとつであり、悪性腫瘍における血管新生や、妊娠高血圧症に関連しているとされている。RGS5 は正常な胃腸腺上皮、中枢神経系の神経細胞、膵臓ランゲルハンス島に存在し、悪性腫瘍では様々な腫瘍細胞の細胞質、細胞膜に発現が見られる。肺の非小細胞癌では RGS5 の発現が弱いものでは静脈侵襲及びリンパ節転移と強く関連しており、肝細胞癌では RGS5 が過剰発現しているものでは腫瘍の転移を促進させるとの報告もみられ、RGS5 は腫瘍の浸潤、転移と関連があると考えられる。本研究では口腔癌の浸潤様式、転移に関連した RGS5 の発現について検討を行った。舌扁平上皮癌 43 例のホルマリン固定後パラフィン包埋組織を用いて RGS5 染色を行い、RGS5 高発現群と非発現群では腫瘍浸潤様式、腫瘍浸潤距離、リンパ管侵襲において有意差がみられた。また非発現群に比べて発現群では早期に術後頸部リンパ節転移を生じる傾向がみられた。また上皮間葉転換の指標である vimentin、E-cadherin 染色を行い、腫瘍浸潤部において vimentin 発現は増加し E-cadherin 発現が減少しており、上皮間葉転換が生じていることが示唆された。また腫瘍浸潤部における RGS5 発現と vimentin 発現には正の相関関係、RGS5 発現と E-cadherin 発現には負の相関関係を認めた。本研究により舌癌における RGS5 の発現は腫瘍浸潤やリンパ管浸潤と関連しており、また上皮間葉転換と関連している可能性が考えられた。